

特集

アップデート & ブラッシュアップ

脳卒中診療 の最前線

わが国における脳卒中の現状を振り返ると、1年間の死因別死亡総数のうち、脳血管疾患は10万9,880人で（2017年）、近年では三大死因の3番目の座を老衰や肺炎などと争っています。年々高齢化が進んでいるわが国では、改めてしっかりと認識する必要がある疾患です。また、脳血管疾患にかかわる医療費も年々増加傾向にあり、とくに訪問看護医療費や療養費の増加が顕著となっています。これを鑑み、2018年には「脳卒中・循環器対策基本法」が成立し、そして2021年には「脳卒中治療ガイドライン」も刷新されたなか、脳卒中の急性期診療はどのように変わっていくのか、どのように変わるべきなのか、そのフロントラインに立つ救急医は最新の知識を得ておく必要があるでしょう。

そこで今号の特集では、心原性脳塞栓症や重症脳卒中の発生が多くなる寒い季節の刊行ということも意識して、本誌読者の脳卒中診療に関する知識を“アップデート&ブラッシュアップ”するために、その最前線をまとめる特集を企画しました。

例えば、脳梗塞や脳出血、くも膜下出血は、神経救急疾患のなかでも初期治療・集中治療管理が転帰に大きな影響を及ぼす疾患です。脳梗塞患者における治療ではt-PA治療が広く普及してきた一方、しっかりとした適応・除外基準の遵守、治療前後での合併症予防と早期認知が重要です。血栓回収術の適応も改めて理解しておく必要があるでしょう。くも膜下出血の神経集中治療においては、脳血管攣縮予防が永遠の課題です。脳出血では手術治療の適応判断のみならず、抗血栓薬の中和に関する知識なども十分心得おかなければなりません。そして、脳卒中診療では初期診療から神経集中治療、リハビリテーションに至るまで、シームレスなチーム医療が求められます。このチーム医療はまさに、救急医の得意とするところでしょう。本特集ではこのような、救急医に必要となる脳卒中診療のminimal essentialsを、その道のエキスパートの先生方にご教授いただきました。

脳卒中診療に関する知識が“アップデート&ブラッシュアップ”されることで、少しでも患者の生命転帰改善、そしてその先の社会復帰につながることを信じ、本特集をお届けいたします。

『救急医学』編集委員会

企画担当：日本医科大学大学院医学研究科救急医学分野 横堀 將司